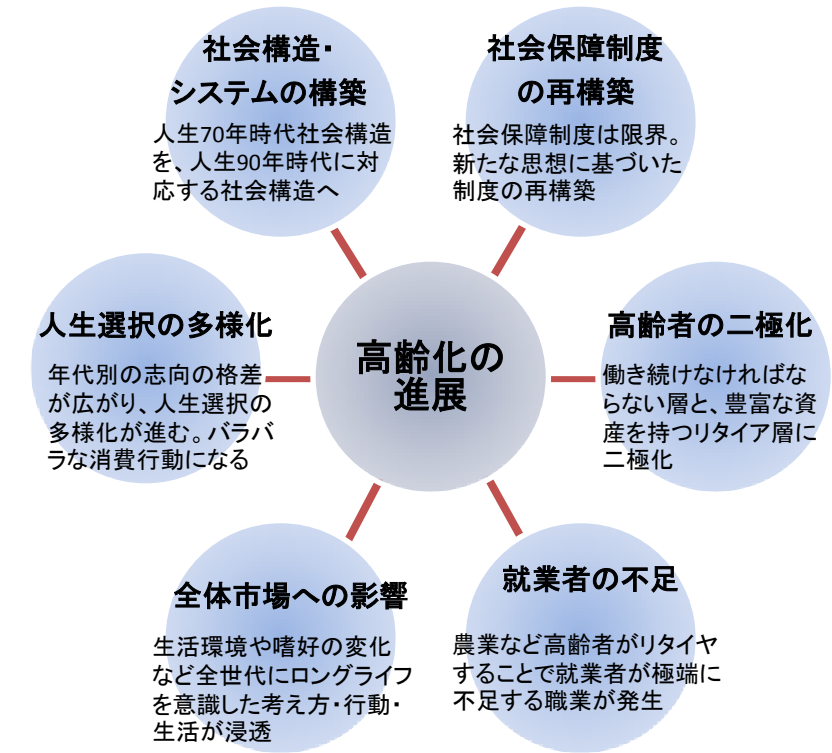


4-4. ロングライフ型経済への移行(日本)

日本社会は、長く延びた人生を前提とした構造に変化していく。文化・制度・インフラ・働き方に至るまで、ロングライフに適合する社会・経済構造がつくられていく。(図25)

図25 ロングライフ化

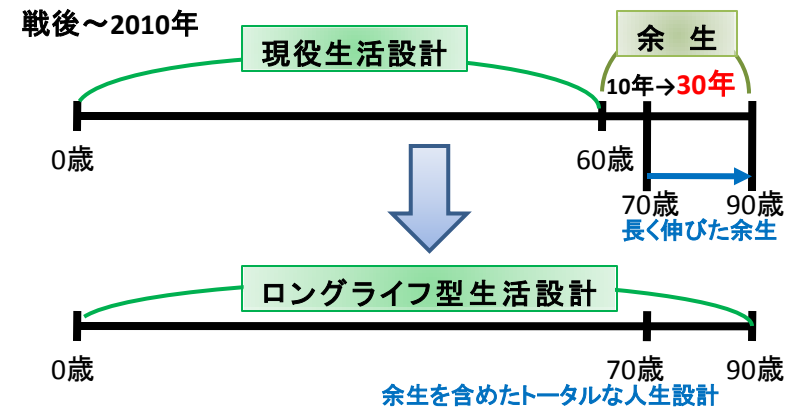


日本人の平均余命は大きく伸び、男性79歳 女性86歳と人生80年時代から90年時代に向かっている。つまり、ライフステージが、多くの制度が生まれた時代に比べ、10年以上長くなっているのである。

しかし、社会構造・システムはまだ人生70年時代を基盤としている。このギャップの解消が2009-2019の主要なテーマとなる。

すでに若年層でも就学期間が延び(大学院就学増、資格取得就学増)、晩婚化、第一子出産期の高年齢化が進んでいる。全体的な生涯設計が広がるとともに多様化しているのである。(図26)

図26 ロングライフ化



これに対して社会構造は60歳、あるいは65歳で定年し、以降は一括りに余生を暮らすというしくみになっている。人生70年時代には10年であったこの期間が今日では20年を超え、女性では30年になろうとしている。

ロングライフ型生活設計がうまくいってないことは意識調査にも表れている。老後の不安は年々高まっており、特に50代と、20代に老後の不安感が高い。

50代は直前に迫った老後に年金不信が背景となっていると考えられるが、20代はロングライフを見通した生涯設計がうまくできていないことに対する漠然とした不安を抱えていることを伺わせる。50代までに人生の主要な活動を終え悠々自適な余生を送るという考え方は現実的ではなく、健康を維持しながら70～80代まで社会に参加し続ける生活をイメージするライフスタイルが模索されているのである。